

高校教員がすすめやすい／すすめにくい入試ヒアリング結果

※編集部調べ

|      | 進学状況                 | すすめやすい入試                                                                  | すすめにくい入試                                                                     | 最近の高校生の傾向と私大への要望                                                           |
|------|----------------------|---------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------|
| 公立A校 | 私立大中心。<br>国公立大進学者もあり | ▶経済学系なら数学も課すなど学びに必要な教科が受験教科の一般入試<br>▶学力試験を課す推薦・AO入試<br>▶100字程度の記述式、論述式の入試 | ▶学力試験を課さない推薦・AO入試。センター受験を必須にするなど冬まで勉強させるようにした方が、大学にとっても質保証につながるのではない         | ▶科目を絞って受験できる大学を選ぶなど、効率よく大学に合格しようとする生徒が増加中。教科・科目横断的な入試の増加を望む                |
| 公立B校 | 私立大中心。<br>専門学校進学者もあり | ▶10月以降に行われる入試<br>▶アドミッションポリシーに基づく入試<br>▶入学後の学びに必要な科目を必須とする入試              | ▶AO入試。学生募集自体が目的の、生徒にこびた入試が目立つ。8月受験では生徒が考えたり準備する時間がない<br>▶大学での学びに必要な科目を課さない入試 | ▶指定校推薦でさえ安全圏の大学を申請するような「安・近・短」志向は、最近の生徒の気質もあるが、経済的な要因も大。高額な学費のため選択肢が狭まっている |
| 私立C校 | 私立大中心。<br>国公立大進学者もあり | ▶一般入試。受験を通じてチャレンジする力、がんばる力を養うために<br>▶推薦・AO入試であれば、課題や書類がシンプルでコンパクトな入試      | ▶8月から始まるAO入試は対策しにくい。そもそもAO入試を志望する生徒は成績が足りない、欠席が多いなどの問題があることが少なくない            | ▶大学選びに緊張感がない。「安・近・短」で選びがち<br>▶学費は進学先決定の大きなファクター。複数合格したら、学費が安い大学を選ぶ         |
| 私立D校 | 私立大中心。<br>国公立大進学者もあり | ▶学力で評価される入試<br>▶得意な分野を高評価してくれる入試（英語の外部検定活用入試など）                           | ▶選考が長期間にわたるAO入試。不合格の場合大学進学への意欲がなくなる<br>▶グループ活動による評価。評価基準が不明瞭で、指導が困難          | ▶学生確保のための入試の早期化は反対<br>▶学力試験でない試験の場合、なぜ不合格だったのかをきちんと受験生に伝えるしくみが必要ではない       |

# 高校の先生がすすめにくい入試

今や、高校生の志望校選びや出願に最も影響を与えている高校の進路指導。今の大学入試は高校現場でどう評価されているのかを、探る。

## 問題提起 1

取材・文／児山雄介  
撮影（田村隆憲）／柳田隆司

**複雑化した大学選び  
高校の進路指導が手厚く**

私はベネッセコーポレーションに在籍中、高校向けの事業に携わり、千校以上の高校を訪問し、全国のさまざまな高校の先生と仕事



(株)進研アド  
代表取締役社長  
**田村隆憲**  
たむらたかのり●(株)ベネッセコーポレーション高校事業部の中・四国支社営業統括責任者、首都圏営業統括責任者、全国営業統括責任者、(株)進研アド営業本部長を経て、2016年4月より現職。

をしておりました。高校の進路指導現場は、私が見てきたこの20年の間、様変わりしています。一言で表現すると、都市部の高校における生徒の出願先決定に教員が関わる度合いがはるかに高まっているのです。

地方の進学校では従来より進路指導が手厚かった一方、都市部の高校では教員が積極的に生徒に進路を考えさせたり、生徒が希望する進路に意見したりする場面は少なかったと言えます。

しかし、90年代よりさまざまな学部学科が新設されるとともに、入試方式も多様化、私立大学志願者が大幅に増加した結果、大学選びが非常に複雑になり、高校に手厚い進路指導が求められるようになりました。そのため、都市部では進路指導が充実した私立高校の人気が高まり、複数の都市において公立と私立の進学実績が逆転す

るところが出てきました。その状況に対して教育行政が、2000年ごろから公立高校の進路指導改革を推進し始めたのです。

現在では公立・私立・地方・都市部問わず、進路指導の充実度が高校の評価に直結しています。これはつまり、生徒が志望校を検討したり、出願先を決定する際に影響を受ける人物が高校教員であるということを示しています。大学にとっては、高校教員が「どんな入試」で「どんな大学」を評価しているのかを熟知することが、学生の募集戦略上非常に重要であると言えるでしょう。

## 高校3年間の指導と努力の先に大学入試がある

多くの高校教員は、生徒の希望進路実現のため、高校3年間で、学び続ける意欲と姿勢を身に付けてほしいと考えています。つまり、高校の指導の延長線上に大学入試があってほしいわけです。

ですから、高3の最後まで無駄にせず真面目に努力し続けたことが反映される入試や、そのような入試を実施する大学を、高校教員は評価します。一方、勉強しなくても簡単な面接だけで合格できる入試や、1、2教科だけの入試は、

高校教員に敬遠されがちです。今回ヒアリングした4つの高校でも、努力した人としていない人の差が出ていく入試は、生徒の成長を妨げることから「すすめにくい」とされています(図表)。求める学生像が不明確で志願者を集めるためだけに、受験生にとって負担の少ない入試方式を増やすことは、少なくとも高校教員に対しては逆効果でしょう。

入試方式を増やしている大学でも、そのポリシーが明確であれば支持されています。重要なのは、求めている学生と選抜方法に整合性があるかどうか。最近では、総合的な学習の時間などを使って、志望校のアドミッションポリシーを調べさせる高校もあります。

多くの高校が、大学に対して「もっと情報を発信してほしい」と思っています。進路指導における教員の責任が重くなり、生徒一人ひとりに適した大学、適した入試をすすめるなければいけないのに、意図が酌みにくい入試が多すぎるとい声もよく聞きます。

高校の先生にとっては、送り出した生徒が進学先で成長することが一番の喜びです。親身に生徒を成長させようという意図が伝わる入試や大学には心を打たれ、生徒に積極的にすすめるはずで

## ミスマッチを防ぐために何ができるか

「志望校(＝目標)を決め、模試などを通じて実力を自己分析し、目標達成に向かって努力する」——このように高校の進路指導は、「大学受験を通じて生きる力を育てる」ことをめざしています。いわば大学受験は、受験を通じて大学で伸びる土台をつくるのです。

だからこそ、高校にとっても大学にとっても、そして受験生本人とその保護者にとっても、大学入試における共通の願いの一つが、入学後のミスマッチを防ぐことではないでしょうか。責任を押し付け合うのではなく、4者がそれぞれの立場から、何ができるのかを模索しなければいけません。

これだけ入試方式が多様化している状況では、特に情報の識別共有が重要でしょう。大学は入試に込めた狙いを正確にかつ、具体的に発信し、高校教員はエビデンスに基づいた指導を行う。生徒や保護者には入学後に成長できる進学先を探すリテラシーが必要で、大学や高校にはそれを養う責任があります。この責任をどのように果たすのか、私たちは大学の皆さんと共に考えていきたいと思っています。

## その入試は、どんな人間を育てるためのものか

高校教員が知りたいのは、志願者数や合格者数などの表面的な結果だけではなく、選抜過程で何を評価し、どんな学生を育てるのかという、入試に込められた考えなのです。その意味で最近各入試教科の評価方法や入試結果の詳細を公表するなど、入試への思いが見える大学が増えてきたのは喜ばしい傾向です。

入試は狙いと内容次第で、大学全体の学生の質を変える力を持っていると思います。たとえマーク式の試験でも、センター試験のように知識に加えて、その活用能力を測ることは可能です。また、少数でも、学びの面でリーダーになるような学生を入学させることができる。これは、大学の教育力アップにもつながるのではないのでしょうか。

高校時代の学習姿勢を評価する入試が増えることを期待しています。



東京都立西高校  
主幹教諭  
**寺島 求**

てらしまもと●都立高校改革の先頭に立ち、進路指導プログラムを開発。現在は「受験を通じて人間力を高める」をモットーに、全国の高校の進路指導アドバイザーを務める。